

また、「人口」セッションにおいては下記の3報告があり、活発な議論が交わされた。

「国際労働力移動としての現地採用日本人女性—シンガポールにおける調査から」

……………中澤高志（大分大）ほか

「国際結婚移住女性に対する自治体支援施策の展開」

……………神谷浩夫（金沢大）ほか

「過疎地域における定住者と転出者の意識構造—東北地方の某町を例に」

……………山口泰史（荘銀総合研）ほか

（小池司朗記）

第73回日本民族衛生学会総会

日本民族衛生学会の2008年年次総会（会長：高坂宏一・杏林大学総合政策学部教授）は10月26～27日、パシフィコ横浜・会議センターで開催された。少子化と人口高齢化が進行し子どもを取り巻く環境も変貌している日本の現状を少子高齢化社会のライフコースとして検討することが意図され、会長講演、シンポジウム（子どもの成長について、その変化と影響要因を考える）、特別講演（2題）が組まれた。また口演と示説の形式で、多数の一般演題報告がなされた。佐藤は2日目に特別講演1として「日本の超少子化：その原因と対策をめぐって」と題する講演をおこなった。本大会を通して、医学・保健学方面からの人間のライフコースや生態系に関する研究と人口学研究との接合に大いに期待が寄せられた。（佐藤龍三郎記）

東・東南アジアにおける低出生力とリプロダクティブ・ヘルスに関する 国際カンファレンス

日本大学人口研究所（小川直宏所長）主催、世界保健機関（WHO）、国連人口基金（UNFPA）、国際人口学会（IUSSP）および毎日新聞社後援による学術会議（International Conference on Low Fertility and Reproductive Health in East and Southeast Asia）が2008年11月12日から14日までの3日間にわたりホテル・グランドパレス（東京都千代田区）で開催された。人口学、公衆衛生学、生殖医学など多分野から、また米国（Larry Bumpass, Ronald Rindfuss, Robert Retherfordなど）、欧州、オーストラリア（Peter McDonald）、アジア（韓国、中国、タイ、ベトナムなど）など世界各地および日本から約50人の専門家が集い、「少子化」と「リプロダクティブ・ヘルス（性と生殖に関する健康）」、しかも「東・東南アジア」に注目して、という新しい研究視点から活発な議論を繰り広げた。2題の基調講演と28題の研究報告（それぞれに討論者）からなる議論は多岐にわたったが、なかでも従来少子化の原因探索において、いわば傍流（非主流）の地位に甘んじていた不妊（精子数減少？）、性行動の変化（セックスレス・カップルの増加？）、東アジアの特殊性といった話題にスポットライトが当たったのは意義深いことに思われた。本研究所の佐藤は岩澤美帆室長と共同で“Does promoting reproductive health benefit Japanese fertility? : New policy dimensions of very low fertility”と題する研究報告をおこなった。（佐藤龍三郎記）